



岩手県沿岸南部における オオセツカ *Locustella pryeri* の越冬状況

千葉一彦¹・作山宗樹²

1. 〒 026-0002 岩手県釜石市大平町 1-7-28

2. 〒 020-0003 岩手県盛岡市下米内 2-10-10

はじめに

オオセツカ *Locustella pryeri* はスズメ目ウグイス科センニュウ属の小鳥で、中国東北部、ロシアのウスリー地方および日本に分布し、日本のものは亜種オオセツカ *L. p. pryeri* とされる（茂田 1991）。日本国内の生息数は 2500 羽強とされ、現在繁殖が確認されているのは主に青森県の仏沼、岩木川下流域および千葉県と茨城県にまたがる利根川下流域の 3 地域であり（上田 2003）、その希少性から環境省レッドリストに絶滅危惧 I B 類（EN）として掲載されている（環境省 2006）。冬期間は関東から瀬戸内海沿岸にかけての太平洋側で越冬するとされ、雪の少ないヨシ原に広く分布していると考えられる（永田 1997、金井・植田 1994）。関東以北では、宮城県の複数の河口域、湿地等で冬季の生息が確認されている（山階鳥類研究所 1996、日本野鳥の会宮城県支部 2002）。渡りを行う鳥類の保全を図るためには、繁殖地、越冬地および渡りの中継地それぞれの環境保全が重要と考えられるが、オオセツカの越冬地および渡り中継地における情報は不足している（永田 1997、中里・上田 2003）。

岩手県は、オオセツカの繁殖地がある青森県の南に位置し、太平洋側にある仏沼の繁殖個体群が茨城県と千葉県に渡ること（山階鳥類研究所 1997）、および秋に渡りの通過個体と考えられる個体の捕獲があること（千葉ほか 2005）から、渡りの中継地となっている可能性がある（千葉ほか 2005）。しかし県内での繁殖期や越冬期の記録は無く（岩手県生活環境部自然保護課 2001）、これらの期間の生息状況については不明である。

これまで、オオセツカの越冬生息確認の北限は宮城県であった（日本野鳥の会宮城県支部 2002）が、今回、筆者らは宮城県の北に位置する岩手県沿岸南部で、冬季のオオセツカの生息状況について調査を行ったので、報告する。

調査地および調査方法

調査は岩手県沿岸南部の 4 箇所のヨシ原、釜石市鶴住居の鶴住居川河口域（39°20'N, 141°54'E, 標高 1~2m）、大船渡市三陸町吉浜の吉浜川河口域（39°09'N, 141°50'E, 標高 7m）、大船渡市赤崎町亀井田の盛川河口域（39°04'N, 141°44'E, 標

2011 年 2 月 21 日 受理

キーワード：オオセツカ, *Locustella pryeri*, 越冬地, 休耕地, ヨシ原, 岩手県

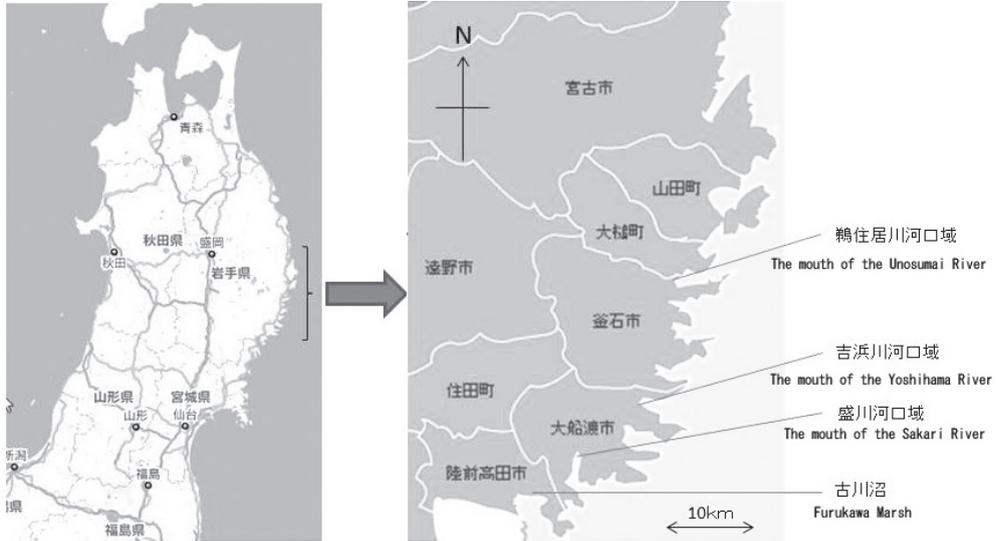


図1. 調査地位置.
Fig.1. Study sites.

高1～2m) および陸前高田市高田町の古川沼(39°00'N, 141°38'E, 標高2～8m)で行った(図1)。これまでオオセッカの冬季生息が確認された場所は、湿潤でヨシ *Phragmites communis* Trin. がまとまって生えている他にスゲ類等の下層植生が見られるといった特徴が報告されており(靱山1949, Moyer1953, 永田1997, Nagata & Yoshida1997), 同様の環境が今回の4調査地においてもあることから、オオセッカの生息地となっている可能性が考えられた。

鶉住居川河口域は、左岸側に広がる休耕地と、農業用水路およびその貯水池に半円状に囲まれた湿地帯から成り、面積約40haで放棄地、湿地帯ともヨシが優占種となっている。この河口域は、県内で唯一オオセッカが記録された場所である(千葉ほか

2005)。吉浜川河口域は、クロマツ林と住宅地に挟まれた河口左岸側の休耕地で、面積約3haで、ヨシが優占種となっている。盛川河口域は、大船渡市街地を流れる盛川の河口から上流側1km付近までの右岸、左岸に、幅数m～30m程の連続したヨシ原がそれぞれ約0.7ha, 約3.5haある。古川沼は汽水池で、岸辺にヨシ原が散在している(合わせて面積約1.6ha)。特に上流側の流れ込みの周囲にまとまったヨシ原がある(図2a-d)。

調査方法は、プレイバック法およびかすみ網による捕獲に依った。

プレイバック法では、生息の有無の確認および個体数の推定を行うことを目的に、調査地のヨシ原に接するように踏査ルートを設定し、このルート上を歩行しながらおよそ20～30mおきにオオセッカのさえぎり

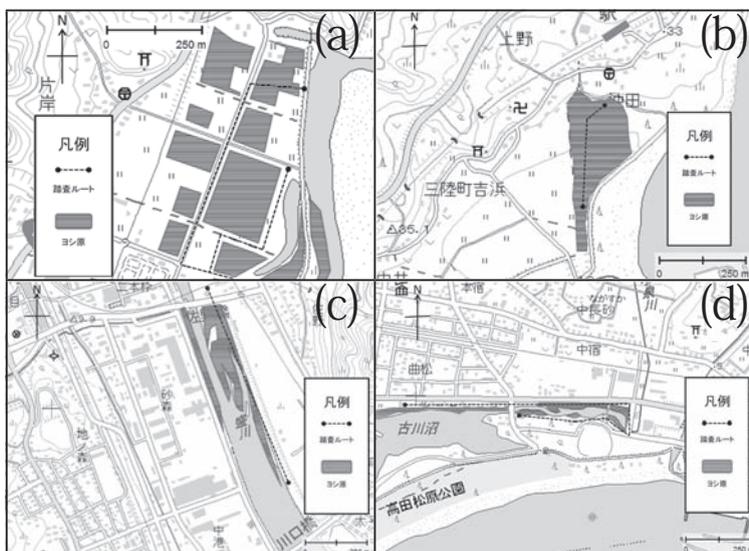


図2. 踏査ルート .a: 鶴住居川河口域, b: 吉浜川河口域, c: 盛川河口域, d: 古川沼

Fig.2. The census route; a: the mouth of the Unosumai River, b: the mouth of the Yoshihama River, c: the mouth of the Sakari River, d: Furukawa Marsh.

音源をカセットテープレコーダーまたはCDプレイヤーで再生し、再生音に反応して出す声または出現する個体を確認した。プレイバック法は、山階鳥類研究所(1996)でオオセッカの冬季生息を確認した実績があり、有効な調査法と考えられた。オオセッカのさえずり音源は上田(1998)に収録されているオオセッカのさえずりを使用した。調査は、オオセッカの活動が活発となると考えられる日没前の時間帯(佐藤文男, 私信)を中心に晴天または曇りの日に行ったが、この時間帯に行えない場合もあった(表1)。設定したルートは、鶴住居川河口域では休耕田の畦道沿いに長さ約1.4km、吉浜川河口域では休耕田のほぼ中心を貫く形で、長さ約0.3km、盛川河口域では左岸側のヨシ原沿いに約0.8km、古川沼では上流側から右岸沿いに下流側へ約1.3kmであった(図2 a-d)。

調査は2008年12月~2009年3月の間、各調査地で2~6回行った。また2010年1月~3月には、鶴住居川河口域で3回、吉浜川河口域で1回、調査を行った(表1)。なお、鶴住居川河口域では2008年12月20日には強風のため全く記録が得られなかったことから、翌21日に再調査を実施した。2010年1月23, 24日は2日間をかけてルートを踏査したので、調査回数はこの2日間で1回と数えた。2009年2月11日および2010年2月11日は、捕獲調査を合わせて実施したことから時間が制約されたため、踏査ルートのほぼ約半分(中間部分)で調査を実施した。

かすみ網による捕獲は、個体の性別、年齢を把握することを目的に鶴住居川河口域において環境省の捕獲許可を得た上で2009年2月11日および2010年2月11日に30メッシュ(長さ12m)のかすみ網2枚

表 1. 調査実施状況およびオオセッカ確認個体数

Table 1. Number of Japanese Marsh warblers observed in the study sites

調査地 Study sites	調査年月日 Date	調査時刻 Time	確認個体数 Number of warblers	備考 Remarks
鶴住居川河口域 The mouth of the Unosumai River	2008/12/20	15:15~16:30	0	強風
	2008/12/21	15:20~16:38	11~12	
	2009/1/4	15:30~17:00	3	
	2009/1/26	16:10~17:20	11	
	2009/2/11	16:30~17:58	5	捕獲調査を合わせて実施。踏査はルートの一部で実施
	2009/3/1	16:35~17:40	4	
	2010/1/23	16:30~17:30	3~4	一部、未調査部分あり
	2010/1/24	6:30~7:00	1	1月24日の未調査範囲を調査
	2010/2/11	16:55~17:30	5	捕獲調査を合わせて実施。踏査はルートの一部で実施。
	2010/3/7	16:30~17:30	2~3	
吉浜川河口域 The mouth of the Yoshihama River	2008/12/23	14:50~15:30	0	
	2009/2/11	10:00~10:40	1	
	2009/2/22	13:40~14:10	0	
	2009/2/28	16:50~17:20	1	
	2010/2/11	15:40~16:00	0	
盛川河口域 The mouth of the Sakari River	2009/1/17	15:50~16:50	1	
	2009/2/22	14:40~15:20	0	
古川沼 Furukawa Marsh	2008/12/23	16:10~16:50	0	
	2009/1/17	14:28~15:25	0	

を使用して行った。捕獲に際してはプレイバック法と同様に、網の近くでオオセッカのさえずり音源をカセットテープレコーダーで再生し、誘引を行った。捕獲した個体については環境省リングを附した後、測定と写真撮影を行い放逐した。

結果

プレイバック法によって、鶴住居川河口域、吉浜川河口域および盛川河口域でオオセッカを確認した（表 1）。

このうち、鶴住居川河口域では、2008年12月~2009年3月の冬季には、強風の12月20日を除く各月の調査日に毎回個体

を確認した。確認個体数は、2008年12月21日の11~12羽が最大で、1月4日は3羽の確認であったが、続く1月26日の調査では最大に近い11羽を確認した。その後も2月11日に5羽、3月1日に4羽を確認した。2010年1月~3月の冬季も各月、個体を確認し、個体数は1月4~5羽、2月5羽、3月3羽であった。吉浜川河口域では、2008~09年の冬季では4回の調査のうち、2月に行った2回の調査で各1羽を確認した。2010年の冬季では、2月に1回調査を行ったが確認できなかった。盛川河口域では2009年1月に行った調査で1羽を確認したが、翌2月の調査では確認でき



図3. 2009年2月11日に鶴住居川河口域で捕獲したオオセッカ *Locustella pryeri* (撮影:千葉一彦)
Fig. 3. A Japanese Marsh Warbler captured at the mouth of the Unosumai River on 11 February 2009 (photo by K.Chiba).

なかった。古川沼では2008-09年冬季に2回調査を行ったが全く確認できなかった。

なお、プレイバック法で流したさえずりに反応したオオセッカのうち、鶴住居川河口域では地鳴きによる確認個体は2008-09年の冬季では延べ30-31羽、2010年の冬季は延べ8-10羽、声は出さずにヨシの上部またはヨシ原の縁に出てきた個体は2008-09年の冬季では延べ4羽、2010年の冬季は延べ3羽であった。吉浜川河口域と盛川河口域で確認した個体は全て地鳴きによる確認であった。

捕獲調査では2009年2月11日に1羽を捕獲した(図3)。測定値は自然翼長55.0mm、尾長61.1mm、ふしよ長19.0mm、全頭長30.8mm、露出嘴峰長8.5mmであった。測定値から雄と考えられた(茂田1991)。また、頭蓋骨の含気化は完了していたため、成鳥と考えられた(茂田1991)。2010年2月11日には1羽が網に入るのを確認したが、回収前に抜け出したため、測定、撮影は行えなかった。

考察

今回の調査から鶴住居川河口域では、オオセッカが冬季の各月に複数個体が確認

され、越冬が確認された。確認個体数は2008-09年の冬季は最大12羽、2010年の冬季は最大5羽であったが、踏査ルートの確認範囲は、ヨシ原全域をカバーしていない(図2a)ため、この地域には更に多くの個体が各冬季に越冬していたと考えられる。

オオセッカの越冬期における生息環境の報告事例は少ないが、これまでに、低い雑草の立枯れがたくさんある湿地で、イヤヒライが倒れている所の下にいる(舩山1949)、泥深い沼沢地、ヨシ原に生息する(清棲1952)、ヨシに柔らかい下草が混じっているところに生息し、ヨシが密生しているところにはいない(Moyer 1953)、あるいは、スゲ・ヨシ群落、カモノハシ・ヨシ群落等の植生に生息していた(Nagata & Yoshida 1997)との報告がある。また、永田(1997)では、ヨシの根元が水に浸かっていた点を、山階鳥類研究所(1996)では、河口部に見られるような地面が湿潤で低層部にカヤツリグサ科の植物が密生しているような環境を好む傾向がある点を指摘している他、積雪が少ないことも重要と考えられる(永田1997、金井・植田1994)。鶴住居川河口域ではこのような環境条件が広

く見られ、今回2冬季連続で3~10羽以上の生息を確認したことから、オオセッカの越冬地となっている可能性が考えられる。

吉浜川河口域および盛川河口域は、一部はヨシの根元が水に浸かっているが、鶺住居川に比べるとやや乾燥した環境であった。これらの場所で確認記録数は1羽と少なかつたため、冬期間を通じた利用の有無は不明であったが、少なくとも少数個体が一時的に利用していたと考えられる。

何れの場所も以前から冬季の利用があったのか、最近利用が始まったのかは、過去の調査記録が無いことから判断はできない。但し、越冬が確認された鶺住居川河口域では、2001年までは水田耕作が行われており、2002年から徐々に放棄地が増えたことから、遷移が進み、ヨシ原となったと考えられる(千葉 未発表)。そのため、オオセッカが越冬するようになったのは、2002年以降の可能性が高いと考えられる。

繁殖期には、オオセッカの雄はヨシの茎の先端に止まってさえずったり、さえずり飛行を行う(三上 1998)ため、オオセッカの確認は容易である。しかし越冬期には、湿地のヨシ原の低い草が重なって倒れた地面に近い場所において、ヨシ原の外にはほとんど出ず、さえずりもしないことから、目立ちにくく確認が非常に難しい(靱山 1949, 金井・植田 1994)。オオセッカでは越冬期の情報が不足している(永田 1997, 中里・上田 2003)のは、このことが原因の一つと考えられる。今回プレイバック法で再生したさえずりに反応して、オオセッカはヨシ原内で地鳴きするだけでは

なく、ヨシの上部やヨシ原の縁に姿を現すこともあった。そのため、この方法は越冬期のオオセッカの確認に有効な手段であり、越冬生態の解明に役立つと考えられる。

オオセッカでは、越冬地が繁殖地になった例が茨城県の浮島で知られており(金井・植田 1994)、栃木県の渡良瀬遊水池では秋の渡り時期に初めて確認され(深井・人見 1996)、その後、繁殖が確認されている(平野 2010)。オオセッカの繁殖期の主な生息場所は、スゲ類などの下層植生が発達したヨシ原であり(西出 1993, 藤田ほか 1994, 植田・金井 1994, Fujita & Nagata 1997)、ヨシの草丈が1.0~2.2mの場所で生息密度が高かったことが報告されている(中里・上田 2003)。また、仏沼で繁殖するオオセッカは、野焼きが行なわれて、枯れヨシの存在しないヨシ原に、より高い密度で生息する(中里・上田 2003)が、野焼きが行われていない自然状態に近いヨシ原においても生息が確認されている(杉浦ほか 2003)。仏沼では近年、繁殖個体数が増加し、その要因として耕作放棄により繁殖適地であるヨシ原が増加したことが考えられている(高橋ほか 2010)。今回越冬が確認され、秋の渡りの時期に捕獲記録がある(千葉ほか 2005, 千葉 未発表)鶺住居川河口域でも最近放棄地が増え、ヨシ原へと遷移し、繁殖適地が増加していると考えられる(千葉 未発表)。また、鶺住居川河口域では、営巣は確認できなかったが、2010年5月8日にさえずっている1羽が観察されている(千葉 未発表)。これらのことから、今後、鶺住居川河口域で営巣す

る可能性が考えられる。

一方、将来的には休耕田の遷移の進行によって、オオセッカの生息に不適な植生となることで、越冬利用が見られなくなる可能性がある。オオセッカの保全を図る上では、今回生息が確認された場所については、今後も生息状況および植生環境に注意を払う必要があり、生息記録が得られていない場所またはこれまでのところ情報が無い場所においても、現状植生および遷移進行後の状況を考慮しながらモニタリングを行う必要があると考えられる。

謝辞

調査方法についてご教示頂いた山階鳥類研究所の佐藤文男氏、文献入手に際しご支援頂いた環境省東北地方環境事務所野生生物課の多田由喜男氏、特定非営利活動法人バードリサーチの平野敏明氏、日本野鳥の会栃木県支部の深井宣男氏、常日頃からオオセッカの生態についてご教示頂き、今回調査のきっかけとなる示唆を与えて頂いた特定非営利活動法人おおせっからんどの蛭名純一氏、多くの有益なコメントを頂いた匿名のレフリー2名および今回投稿を勧めて頂いた三上かつら氏にこの場を借りて深く感謝申し上げます。

引用文献

- 千葉一彦・村田野人・作山宗樹. 2005. 岩手県釜石市におけるオオセッカ *Locustella pryeri* の捕獲記録. 日鳥学誌 54(1): 56-57.
- 藤田剛・永田尚志・福井和二・J. S. Minton. 1994. 仏沼干拓地でのオオセッカの環境選択. 平成5年度希少野生動植物種生息状況調査報告書. pp. 30-35. 環境庁, 東京.
- Fujita, G. & Nagata, H. 1997. Preferable habitat characteristics of male Japanese Marsh Warblers *Megalurus pryeri* in breeding season at Hotoke-numa reclaimed area, Northern Honshu, Japan. J. Yamashina Inst. Ornithol. 29: 43-49.
- 深井宣男・人見潤. 1996. オオセッカ栃木県初記録. Accipiter 2:25-26.
- 平野敏明. 2010. 渡良瀬遊水地におけるオオセッカの初めての巣卵の記録. Accipiter 16: S1-S3.
- 岩手県生活環境部自然保護課. 2001. 岩手県野生生物目録. 岩手県, 盛岡.
- 金井裕・植田睦之. 1994. オオセッカの生息地の分布と現状, 平成5年度希少野生動植物種生息状況調査報告書 pp.1-7. 環境庁, 東京.
- 環境省. 2006. 鳥類のレッドリスト. 環境省報道発表資料 (オンライン). http://www.env.go.jp/press/file_view.php?serial=8929&hou_id=7849, 参照2010-07-31.
- 清棲幸保. 1952. 日本鳥類大図鑑I. 講談社. 東京.
- 三上修. 1998. ヨシ原に生息する鳥類のなわばり形成とそこで見られる種内・種間の関係. Birder 12(12): 34-39.
- 靄山徳太郎. 1949. オオセッカに就いて. 鳥12: 115-143.
- Moyer, J. T. 1953. Notes on *Bradypterus pryeri* from Ibaragi Prefecture. Tori 13: 109-111.
- 永田尚志. 1997. オオセッカの現状と保全への提言. 山階鳥学誌 29: 27-42.
- Nagata, H. & Yoshida, H. 1997. Some on the wintering ecology of Japanese Marsh Warblers, *Megalurus pryeri*, at two sites around Lake Kasumigaura. J. Yamashina Inst. Ornithol. 29:50-56.
- 中道里絵・上田恵介. 2003. 仏沼湿原におけるオオセッカ個体群の現状と生息地選好. Strix 21: 5-14.
- 茂田良光. 1991. オオセッカ翼角に小さな爪がある鳥. 日本の生物 5(3): 48-51.
- 杉浦俊弘・飯田健蔵・樺沢豪・黒岩愛・小林裕志・馬場光久. 2003. 湿性草原への火入れが絶滅危惧種オオセッカ (*Megalurus pryeri*) の分布

- に及ぼす影響. 日本緑化工学会誌 29(1): 255-256.
- 高橋雅雄・宮彰男・津曲隆信・古川博. 2010. 仏沼における2007年から2009年のオオセッカの生息状況. おおせっからんど年報2: 10-16.
- 植田睦之・金井 裕. 1994. 利根川下流におけるオオセッカの環境選択. 平成5年度希少野生動植物種生息状況調査報告書. pp.19-23. 環境庁, 東京.
- 上田秀雄. 1998. 野鳥の声 283. 山と溪谷社, 東京.
- 上田恵介. 2003. 日本にオオセッカは何羽いるのか. Strix 21: 1-3.
- 日本野鳥の会宮城県支部. 2002. 宮城県の鳥類分布. 日本野鳥の会宮城県支部, 仙台.
- 西出隆. 1993. 八郎瀧干拓地におけるオオセッカの生態3. 個体数変動とその変動要因. Strix 12: 41-52.
- 山階鳥類研究所. 1996. 平成8年度環境庁委託業務報告書 オオセッカ生息状況調査. 山階鳥類研究所, 我孫子.
- 山階鳥類研究所. 1997. 平成 8年度渡り鳥アトラス, 鳥類回収記録解析報告書スズメ目編 1961年-1995年. 山階鳥類研究所, 我孫子.

The first record of the Japanese Marsh Warbler *Locustella pryeri* wintering in Iwate Prefecture, northern Japan

Kazuhiko Chiba¹ & Muneki Sakuyama²

1. 1-7-28 Odaira-chou, Kamaishi, Iwate, 026-0002 Japan
2. 2-10-10 Shimoyonai, Morioka, Iwate, 020-0003 Japan

We studied Japanese Marsh Warblers *Locustella pryeri* wintering on the south coast of Iwate Prefecture, northern Japan from December 2008 to March 2009 and from January to March 2010. The species is listed in the Japanese Avian Red List as an endangered species. The study was carried out by using a playback and capture method. In the reedbeds of the mouth of the Unosumi River, 3-11 or 12 birds were continuously observed on each day throughout the study period. It is, therefore, reasonable to assume that this area was a wintering ground of this species. At each mouth of the Yoshihama and Sakari Rivers, however, only one bird was observed on each day in February and January. We presume that Japanese Marsh Warblers have wintered in the study site since 2002 when paddy fields were abandoned. This record shows that Iwate Prefecture is the northernmost wintering ground of Japanese Marsh Warblers.

Key words: Japanese Marsh Warbler, *Locustella pryeri*, wintering, abandoned paddy field, reedbeds, Iwate Prefecture